

第1章 菩提心の利益

サンスクリット語で、ボーディサットヴァチャリヤーヴァターラ
チベット語で、ジャンチュブ・セムペー・チューパラ・ジユクパ
（『入菩薩行論』）

すべての仏陀と菩薩たちに礼拝いたします

1. 法身をそなえた善逝（仏陀）と、仏陀の息子（菩薩）たちと、礼拝に値するすべての方々に敬意を持って礼拝いたします。菩薩の戒律（菩薩行）を実践するために、経典のように簡潔に説くことにしよう
2. かつて説かれていないことをここで述べているのではない。私には文才もない。それゆえ私は他者のためになるとも考えていない。ただ瞑想して自分の心になじませるためにこれを著した。
3. 善行に心を慣らすことで、私の信心は〔ここに述べた〕これら〔の言葉〕によって一時的に強くなるだろう。私と同等のレベルの人にとっても、このテキストを見るならば、その人たちにとっても意味のあるものとなるだろう。
4. 有暇具足をそなえたこの人生はきわめて得がたいものである。人として生まれた意義を果たすために、もしそれ（人間の生）を役立てることができなければ、のちにこのよき条件を完全に得ることなどどうしてできようか。
5. 夜の暗闇の雲の中から、稲妻が一瞬〔あたりを〕照らし出すように、仏陀のお力によって世間の人々が福德を積もうという心を起こすことは稀である。
6. ゆえに善の力は常に弱く、罪の力は大きく耐え難い。完全なる菩提心がなければ、他のいかなる善によっても〔罪を〕抑えることは難しい。
7. 多くの劫にわたって深く思惟なかり、牟尼たちはこれ（菩提心）こそ役に立つとご覧になった。これ（菩提心）によって無数の人々は最勝なる至福を容易に成就する。
8. 輪廻の限りない苦しみを克服したいと願い、有情の不幸をなくしたいと願い、多くの幸せを与えたいと願っているならば、どんな時でも菩提心を捨ててはならない。

9. 菩提心を起こした瞬間に、輪廻の監獄に縛られて苦しみにあえぐ者たちは善逝の息子（菩薩）と呼ばれ、世間の神と人が礼拝する対象となる。

10. すぐれた錬金術のように、この不浄なからだを宝のように尊い勝利者のおからだに変える菩提心を、堅固に維持するべきである。

11. 有情の唯一の指導者は、比類なき〔究極の〕智慧でよく分析され、〔菩提心を〕尊いものとされた。有情の住する輪廻世界を離れたいと願う者たちは、宝のように尊い菩提心を正しく堅固に維持するべきである。

12. 他のすべての善は、芭蕉樹のように実を結んだあとはなくなってしまう。菩提心の樹は、実を結んでもなくなることなく常に増大する。

13. 非常に耐え難い罪を犯したとしても、勇者に頼れば恐怖から解放される。菩提心に頼れば一瞬にして自由になれるのだから、注意深い人ならどうして菩提心に頼らぬことなどあろうか。

14. それは劫末の火のように、大きな罪さえ一瞬にして確実に焼き尽くす。そのはかり知れない利益は、弥勒菩薩によって弟子の善財童子に説かれた。

15. まとめると、菩提心には二種類あることを知るべきである。熱望の菩提心（発願心）と、〔菩薩行の実践に入ることを約束する〕誓願の菩提心（発趣心）である。

16. 行きたいと願うことと行くことの違いを知るのと同じように、賢者たちはこの二つの違いを順次知るべきである。

17. 悟りを願う熱望の菩提心でも、輪廻において大きな結果を得ることができるが、誓願の菩提心のように途切れることなく福德が生じ続けることはない。

18. 〔誓願の菩提心を起こした〕あとは、無数の有情界の者たちをすべて救うために、不退転の心で〔誓願の菩提心を〕正しく起こすべきである。

19. そのあとは、惰眠や不注意な行ないをしても、〔菩提心の持つ〕福德の力が虚空に等しいほど多く絶え間なく生じる。

20. それが正しいということを、如来は『善臂問経』の中で劣った願いを持つ有情たち

のために説かれた。

21. 有情たちの頭痛を取り除こうと考えるだけでも利他の思いを持つことになるので、はかり知れない福德を得ることになる。

22. それならば、有情それぞれのはかり知れない不幸を取り除きたいという願いを持たば、そのそれぞれにはかり知れない功德が成就されることは言うまでもない。

23. 父であれ、母であれ、いったい誰にこのような利他心があるだろうか。天人、仙人、バラモンにさえ、この〔利他心が〕あるだろうか。

24. 以前それらの有情たちは、自分のためであってもこのような心を夢の中でさえ思い浮かべることはなかったのだから、他者のためになど、どうして起こすことなどできようか。

25. 〔梵天や帝釈天など〕他の者たちは、〔はかり知れない過失をなくし、はかり知れない功德を成就しようという心を〕自分のためにさえ起こせないのに、〔菩薩は〕有情たちのために、かつてなかった特別な宝のようなこのすばらしい心を起こされたのである。

26. すべての有情の喜びの因であり、有情の苦しみをなくす甘露〔あるいは薬〕となるものは、宝のような心の福德であり、これをどうやってはかることなどできようか。

27. 役に立とうと考えるだけでも、仏陀に供養することよりはるかにすばらしいのなら、すべての有情の幸せのために努力することは言うまでもなく〔すばらしい。〕

28. 苦しみに逃げたいと望んでいても、苦しみに向かって走って行く。幸せを望んでいても、無明によって自分の幸せを敵のごとく破壊する。

29. 幸せを得られず、多くの苦しみを持つ者たちが、すべての幸せを得て満足し、すべての苦しみを滅して、

30. 無明さえ滅する。それと同等な善などいったいどこにあるだろうか。そのような善き友もいったいどこにいるだろうか。そのような福德もいったいどこにあるだろうか。

31. 助けられた恩に報いる人でさえ何らかの称賛に値するならば、何も求めずに善い行ないをする菩薩については言うまでもない。

32. 少数の有情に対し、いつも食べている粗末な食事をたった一回だけ蔑んで施し、それが半日しか満たされない量でも、善い行ないをしたと他の人たちが尊敬するならば、

33. 無数の有情たちに、長い間如来の無上の幸せを与え、心にある願いのすべてを叶えてやるのが、常に施しをすることであるのは言うまでもない。

34. このような施主である菩薩に対し、もし悪意を持って行為をなすと、悪意を生じた数と同じ数の劫の間、地獄にとどまることになるかと牟尼は説かれた。

35. しかし、〔菩薩に対して〕ある人がとても清らかな心を起こしたなら、その結果は〔信心と熱意を起こしたその数より〕はるかに増えていく。菩薩たちに対して〔緊急の状況において〕悪い行ないをしたとしても、罪は生じず、善は自然に増えていく。

36. 誰かに宝のような聖なる心（菩提心）が生じたなら、私はその方のおからだに礼拝いたします。たとえその方を害しても幸せの縁となる、幸せの源であるその方に帰依いたします。